

IBADAIVERS

多彩な者たちが学び、行き交い、探究している茨大のキャンパス。茨大広報学生プロジェクト&広報・アウトリーチ支援室&茨城在住の編集者が取材した“イバダイバース”の世界、ちょっと覗いてみませんか。

04
JULY 2025

躍進する 茨大発ベンチャーと スタートアップ。

【特集】	
躍進する 茨大発ベンチャーと スタートアップ。	
新たな拠点をつくり、事業創出を加速。2	
事業を拡大展開する 期待の4社	
株式会社エンドファイト 株式会社Dinow 株式会社KiAI エフシー開発株式会社	4
【みんなの“イバダイ学”シンポジウム】 「イバダイの価値を問う」 開催。	
科学史家・隠岐さや香氏を迎え、 14名の教員と100人の聴講者が 熱く議論を交わした日。	8
【コラム】アカデミアIBADAI	
研究に恋して	
教育学野准教授 田原 敬	10
イバダイと地域力	
茨城県立勝田中等教育学校 × 茨城大学	11
【茨大広報学生プロジェクト編集ページ】	
全力！茨大サークルライフ！	12
茨大ほっとステーション	13
先生、ちょっといいですか？ ～茨大教員の素顔を調査！～	14
茨大関連施設にDIVE！	15
【コラム＆ニュース】	
つながるイバダイバース IBADAI NEWS UPDATE	16



PROFILE

酒井 宗寿 教授・副機構長
茨城大学研究・産学官連携機構

2004年、筑波大学大学院地球科学研究科修了。博士（理学）。2018年、茨城大学研究・産学官連携機構に着任し、研究成果の技術移転や他大学等と連携した研究者育成プログラムのコーディネート、大学発スタートアップの創成などに注力。茨城大学原子科学研究教育センター（RECAS）にて社会／地域課題共解決室室長も兼務する。

【特集】 躍進する 茨大発ベンチャーと スタートアップ。 新たな拠点をつくり、事業創出を加速。

大学の現場は新たな技術・産業につながるシーズの宝庫です。近年、大学の研究シーズを活かした大学発ベンチャー、大学発スタートアップの起業が、全国でさかんになっています。茨城大学でも2023年、2024年と立て続けにスタートアップを創出。今後も複数の起業の事業が動き出す見通しです。大学発ベンチャー&スタートアップ創出を加速させるため、茨城大学では起業を促進するための制度の変更や、東京都内の拠点形成などの取組みを進めてきました。勢いづくその現状と未来について、本学研究・産学官連携機構（iRIC）の副機構長を務める酒井宗寿教授に話を聞くとともに、注目を集める茨城大学発ベンチャー&スタートアップを紹介します。

スタートアップ促進のための環境を整備

大学の研究シーズをもとにしたスタートアップ創出の動きは、イノベーションの振興と、大学の運営資金の獲得といった目的から、近年ますます加速しています。国では、国立大学の株式取得に関する規制を緩和するなど支援策を推進。本学でも教員の大学外での仕事の収入の上限規制を撤廃したり、大学の住所を大学発スタートアップの登記上の住所にできるようにしたりといった、スタートアップ促進のための制度の構築を進めてきました。こうした取組みが功を奏して、年1件ぐらいのペースで茨城大学発スタートアップが生まれるようになってきました。本学の教員規模からすれば大きな進展だと思えます。その新たな流れを作ってくれたのが、2020年の株式会社Dinow（本紙P.5で紹介）の創業です。学内の機運醸成という点で、共同創業者の中村麻子教授がファーストペンギンとして挑戦してくれたことは大きかったですね。起業といっても、たとえば学生が自身のプログラミングの技術を利用して主に地域向けのサービス

を立ち上げるのと、急速かつ大規模な成長を目指すスタートアップでは、アプローチが違います。前者なら地域の企業や金融機関などとの密な連携が鍵となります。茨城大学は県内の企業や自治体などの共同研究の件数が多いのが特徴ですから、この支援も引き続き重要です。一方、ディープテックやAIなどを使ったスタートアップとなれば、茨城だけではビジネスにならず、全国あるいは世界を見なければなりません。その競争から逃げてしまうと、いつまで経ってもベンチャーの会社として大きくなれないのが現実です。昨年（2024年）7月に東京都内に新たなオフィスを開設したのも、まさにこの理由からです。国内の投資の半分は東京からのものだというデータもあります。このオフィスが入っているCIC Tokyoは、業種の枠を超えた約300の機関が入居するイノベーションセンターです。他の国立大学や自治体のオフィスもいくつか入っています。共有スペースにはさまざまな国籍の人が集まっていて、毎日のようにピッチイベントが行われています。僕も英語でプレゼンをしました。この場にいと刺激を得られますね。ぜひ多くの教職員のみなさんに利用してもらいたいですね。

スタートアップ／茨大発ベンチャーに関するQ&A

Q1. スタートアップとは？

A. スタートアップとは、革新的なアイデアから新たなビジネスを創出して、社会にインベーションをもたらすような企業を言います。新規株式公開（IPO）や企業買収（M&A）といった出口（Exit）を早期に目指す点も特徴です。

Q2. 茨城大学発ベンチャーとは？

A. 茨城大学の研究成果または人的資源などを活用して起業したベンチャー企業に対しては、「茨城大学発ベンチャー」の称号を付与しています。これまで計10社（既に廃業している企業も含む）に称号を授与しています。

茨城の地域特性も後押しに。新たな連携も。

茨城県自体もスタートアップ創出には力を入れていて、民間の投資を呼び込む仕掛けをどんどんつくっています。筑波大学との連携も強化していて、その意味で東京に近い茨城県の環境は、本学におけるスタートアップ創出にとって大きなアドバンテージです。政策的な流れもあって各地の大学でスタートアップのためのプラットフォームが形成されており、多くの場合は近隣エリアの大学や金融機関などと組んでいます。一方本学は、東京の大学が多く参加する「Greater Tokyo Innovation Ecosystem（GTIE）」という連合体に加わりました。昨年度はこのGTIEと連携したアイデアソンも、茨城大学の主催で2回開催。さまざまな領域の方に集まっていたいて、エネルギーや原子科学といった本学の強みとなる研究分野の社会実装について、かなり突っ込んだ議論ができました。

国による交付金を受け新拠点を創出。さらなる起業の活性化を促す。

2023年創業の株式会社エンドファイト（本紙P.4で紹介）は、本学の成澤孝彦教授と投資家の風岡俊希さんが共同創業したベンチャーです。風岡さんのような、いわばプロの経営者と、本学のニーズとをマッチングできたことは、やはり大きいですね。昨年は1.5億円の資金調達にも成功しており、当初予想していた以上にビジネス規模が拡大しつつあります。大学が大学発スタートアップを通じて収益を得る仕組みというのは、いわば「間接投資」なんです。大学は知的財産権を企業に提供する対価として、現金のかわりに、その企業のストックオプション（新株予約権）を取得します。その後、大規模な資金調達やIPO（新規株式公開）、M&A（企業買収）などで企業の価値が高まれば、ストックオプションの形でもつ大学の資産も高まる仕組みです。大学は

各企業の経営には直接介入しませんが、IPOやM&Aという目標に向けては、伴走して支援していきます。そして、また新たな展開も見えてきました。今年4月、国による「中小企業産業技術・環境・産業標準政策推進事業費補助金（地域大学のインキュベーション・産学融合拠点の整備）」が本学へ交付されることが決まりました。これを活用して、日立キャンパスに「SAKURA BLOOM PARK」という新たな拠点がつけられる予定です。ぜひ期待してください。あくまで個人的な展望としては、教員数の5%程度、30件程度の起業を目標にできればと思っています。今後は、原子科学研究教育センター（RECAS）における廃炉作業のためのデジタルツイン技術の研究やカーボンリサイクルエネルギー研究センター（CRERC）で開発に取り組んでいる、二酸化炭素回収のための新たなDAC技術の実装といったシーズが目玉です。ここにきて次々に出はじめてきた芽を、着実に大きく育てていければと思います。（談）

- 1 CIC Tokyoのエントランスを入ったところにある共有スペース。さまざまな国籍の人たちが集まり、毎日のようにピッチイベントが開かれる。階段を利用して300人が集えるイベントスペースにもなる。
- 2 茨城大学東京サテライトオフィスの入口。ほかに予約制の会議室も利用できる。
- 3 GTIEと連携した本学主催のサイエンスアイデアソンの様子。
- 4,5 日立キャンパスに建設予定の新拠点「SAKURA BLOOM PARK」の完成予想図。



【特集】躍進する茨大発ベンチャーとスタートアップ。 事業を拡大展開する期待の4社

今後大いなる躍進が期待される茨大発ベンチャーをご紹介します。

植物の生育を支える
エンドファイト
植物内生菌の活用で、
「人類に食の幸福を生み出す」。

株式会社 エンドファイト

食糧危機や気候変動の
問題までを見据えたビ
ジョンが起業を後押し

企業名になっている「エンドファイト」は、植物の葉、茎、根といった組織に内生し、生育を支えるような生物を指す言葉だ。応用生物学野（農学部）の成澤才彦教授は、根の部分に内生するDSE (Dark-septate endophyte) という菌類のエンドファイトに着目し、推定で1万種に及ぶDSEを調べ、どの菌がどの作物に対してどんな作用をもたらすかというライブラリーを作ってきた。これまでイチゴやトマト、テンサイなどさまざまな作物の栽培を試し、成長促進だけでなく、病害への耐性の向上、さらには植物にとって過酷な環境でも花を咲かせることにも成功した。北海道のような寒冷地で育つテンサイが、DSEを使った栽培により、温暖な茨城県内でもすくすく育ったという。気候変動への適応策としても大きな可能性を感じさせる実験結果だ。

成澤教授は、この技術を広げ、農業の収量増加やコスト削減につなげたいという思いから、研究・産学官連携機構と相談。やがて大学発スタートアップの支援や投資事業を手がけている風岡俊希さんの目に留まり、成澤教授とも意気投合。2023年4月、風岡さんと成澤教授の共同で株式会社エンドファイトが創業された。

風岡さんは、「食糧危機や気候変動の問題まで見据える成澤先生のビジョンに共感しました。グローバル展開や農法のライセンス事業など大きなポテンシャルがあります」と振り返る。また成澤教授も、「これまでも様々な企業と共同研究をしてきましたが、どうしても今の市場で売れる作物をつくるという段階から抜けられずにいました。その先へ進むには自分で起業するしかないと考えていたところ、風岡さんとビジョンが一致したんです」と語る。

起業のインパクトは大きかった。インターンシップを募集したところ、全国から驚くほどの数の希望が寄せられた。従業員も10人ほどに。そして、起業から1年ちょっとなら経った段階で、1.5億円もの資金調達に成功した。この間の変化に一番驚いているのは成澤教授自身だ。「最初のイメージとは全然違う状況が広がっていますね。もともとは農業担当者向けに、季節を問わず実をならせることができるイチゴの苗の

起業して発信すると、予想もしていなかった建設業界などからも反応があったのです

株域会社エンドファイト
取締役兼 CTO
茨城大学
応用生物学野
成澤 才彦 教授

カナダ・アルバータ大学でのポストドクなどを経て2013年に茨城大学に着任。博士（農学）。

販売などを想定していたのですが、起業して発信すると、予算規模の大きな建設業者のようなところから反応があったのです。予想もしていないことでした。建設業界では都市開発やビル建設の緑化事業における植生への活用などを見込んでいるようだ。

大学での教育・研究にあわせて、企業経営やスピーディーな意思決定にも関わっていくのは大変ではないかと尋ねると、「それはやっぱり大変ですよ（笑）」と返ってきた。それでも「風岡さんが動いてくださることで、稼げるところではちゃんと稼ぎ、そのおかげで私自身は思いきり研究ができます。やりたいこと、できることに、むしろこれまで以上に取り組めるようになりましたし、建設業界からの関心もそうですが、研究テーマの広がりにもつながっています」

と成澤教授は話す。

そして海外展開も。茨城大学で留学生として学んでいた修了生たちが、インドネシアなどの母国でもエンドファイトの研究を続けているため、ビジネスとして連携しやすいのだとか。食糧危機・気候変動という地球規模の大きな問題への、小さな小さな土壌微生物の挑戦は、着々と歩みを進めている。

株式会社 エンドファイト

2023年4月13日設立。DSEの大規模ライブラリーをコア技術として、食・農・環境の各領域を横断するグリーン課題の解決を図る。風岡俊希代表取締役CEO。https://endo-phyte.com/

エンドファイト
「植物内生菌」
——多様な機能のライブラリー

エンドファイトとは、ヒトの腸内細菌と同じように植物の生育を支える働きを有する。とくに、成澤教授は、DSE (Dark-septate endophyte) と呼ばれる根端エンドファイトを混ぜた土で作物を育て、DSEを植物の根に共生させることで、植物のストレス耐性の向上や有機体窒素・リン酸吸収促進、花芽形成促進、土壌のCO₂排出量削減を可能とすること

に成功。これらDSE技術を用いた資材や高付加価値苗を利用することで、通常では生育が困難な環境・条件における質の高い植物の生育が可能となり、農業の環境負荷低減や高付加価値化、都市緑化、土壌・森林再生を実現する。

エンドファイト社ではDSEを1万菌株以上保有しており、世界最大規模のライブラリーを構築している。



あのとき高橋が手を
上げなかったら起業は
できていなかった

放射線が身体にあたると細胞内のDNAに傷が生じる。それらはほとんどの場合そのうち修復されるが、傷の数が多いと発がんや老化関連の病気のリスクが高まる。株式会社Dinowの基盤技術は、このDNAの損傷を可視化して傷の度合いを評価できる「 γ -H2AXアッセイ」という手法だ。基礎自然科学野（理学部）の中村麻子教授は、アメリカのNIH (National Institute of Health) の研究員だったとき、この手法の研究・開発に携わった。

中村教授が、DNA損傷評価の技術の重要性を強く認識することになった出来事がある。2011年、東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故だ。目に見えない放射線の人体への影響の程度が簡便に分かれれば、近隣住民の不安の解消や治療の緊急度の判断につながり、事故時の混乱を抑えることができる。社会実装をスピーディーに進める手段として中村教授が構想したのが、ベンチャー企業の立ち上げだった。

そして東日本大震災から9年後の2020年3月11日、中村研究室所属の大学院生だった高橋健太さんを代表取締役CEOとする株式会社Dinowが設立された。社名は「DNA」と「I Know」という言葉から付けた。掲げたミッションは「DNA損傷評価から『健康』と『安心』を実現する」。高橋さんは博士後期課程に進学し、大学院生とベンチャー企業

たとえば航空業界で働く方々が、自分のDNAの状況を日常的に把握できれば、健康への安心感につながるはずです

株式会社Dinow
代表取締役 CEO
高橋 健太さん

株式会社Dinow代表取締役CEO。2020年3月に中村麻子教授とともにDinowを共同創業。茨城大学大学院理工学研究科博士後期課程在学中。

の経験者という2足のわらじを履くことに。「あのとき高橋が手を挙げてくれなかったら起業はできていなかった」と振り返る中村教授は、取締役CTOに就いた。

普及のためには、採血から分析、評価、フィードバックまでの一連のプロセスのスピードを速める必要がある。血液サンプルを大学へ送ってもらって、実験室で染色・評価するというそれまでのやり方では、1週間程度要してしまう。これでは原発事故などの緊急時や毎日の健康チェックのニーズには応えられない。できれば小型の専用デバイスのようなものを使って、採血から評価まで、現場にて短時間で完結するのが望ましい。高橋さんは国内外のピッチや展示会などに参加し、デバイスの開発に向

DNAの傷から
独自アルゴリズムで
がんなどの健康リスクを推定

株式会社 Dinow ディノウ

けて資金集めやパートナー企業探しに奔走した。

「国内での主要な市場は医療や原子力業界なのですが、実は大きなポテンシャルを有している分野が、宇宙産業や航空業界です」と高橋さん。宇宙空間には高エネルギーの宇宙放射線（宇宙線）がたくさん飛び交っている。地球に振り込む放射線は地球の磁場で多くが跳ね返されるが、大気圏の外側での活動においては、放射線被ばくのリスクが各段に高くなる。「同じ被ばく量でも、DNA損傷の具合は個人によって異なります。パイロットやキャビンアテンダなど航空業界で働く方々が、日々の体調管理のひとつとして自分のDNAの状況を日常的に把握できれば、健康への安心感につながるはずです」と言う。宇宙産業に力を入れる茨城県の補助金事業の採択を受け、デバイスの試作開発の力強い支援となった。

DNA損傷の評価を簡便化するための小型デバイスの開発は、連携する企業と試作を重ね、今年（2025年）1月に最終試作の開発が完了。今年度からは量産試作へと移行しいよいよゴールが見えつつある。蛍光に染まった箇所を直接数えるので、AIによる画像解析技術ともしこぶる相性がいい。ベンチャー経営者とドクターの学生という2足のわらじを懸命に履きこなす日々。「民間人が宇宙に行く時代。DNA損傷の評価がヘルスケアのメジャーな項目になるよう一気にギアを上げていきたいです」。

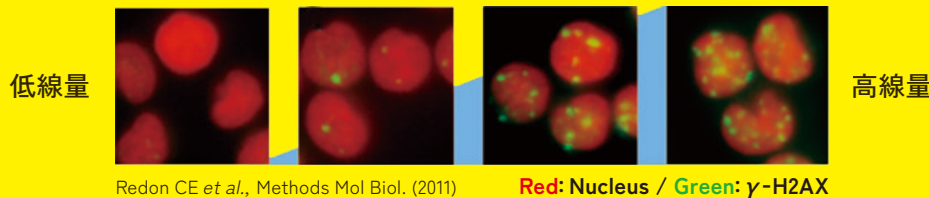
株式会社 Dinow

2020年3月11日設立。DNA損傷の可視化技術を通じた健康上のソリューションを提供する。同年9月に茨城大学発ベンチャーの称号が授与された。2025年4月、ラボ・オフィスを茨城大学内からつくばXis worksiteに移転。https://www.dinow.co.jp/

SEEDS 「 γ -H2AXアッセイ」
——DNAの傷のありかを示すマーカー

DNAは1本の糸のような形状で、ヒストンと呼ばれるタンパク質に巻き付いた状態で細胞核の中に存在している。そのヒストンタンパク質のひとつであるH2AXは、近くのDNAに傷がつくと、リン酸化されて

「 γ -H2AX」という別の物質になる。 γ -H2AXアッセイは、このリン酸化型H2AXを蛍光染色してマーカーとして利用することで、DNAの損傷の数を数える手法である。



Redon CE et al., Methods Mol Biol. (2011) Red: Nucleus / Green: γ -H2AX

新興国や途上国に関する ビジネス情報を 独自の生成AI技術で 収集・分析・報告。

株式会社 KiAI

ケー・アイ・エー・アイ (通称：キアイ)

強力な人的ネットワーク
を駆使して収集した情報
を、AI技術で最適化

2024年、株式会社KiAIに茨城大学発ベンチャーの称号が付与された。茨大の教員や学生・卒業生が創業者とならない企業への付与は初の事例だ。

国際機関などで働いた経験をもつ同社の大場一雅 CEOは、茨城県による「茨城県北地域おこし協力隊【起業・複業型】(KENPOKU PROJECT E)」の事業をきっかけに日立市を拠点とする活動をスタート。2023年9月に株式会社DEVELOPTONIAとして同社を起業。その後、主力サービス名に合わせて株式会社KiAIに名称変更した。「人口減少が著しい県北地域でスタートアップを起こし、ビジネスを通じて地域にインパクトを与え、課題解決に挑めるのは非常にやりがいがあると思いました」。日立市のコーディネートにより同じ日立市内にある茨城大学工学部とつながり、ビジョンに強い関心をもった新納浩幸教授が協力で名乗り出た。自然言語処理・機械学習が専門の新納教授は、現在同社で最高AI責任者(CAIO)を務める。

同社が提供する「KiAI」というサービスは、海外の多様な国・地域でのビジネスに役立つような情報を、独自の生成AI技術によって収集・分析し、最適化して顧客にレポートするというもの。利用者は地域やカテゴリを選択して必要な情報をほぼリアルタイムに入手できる。現在、官公庁や商社、銀行、観光業界など幅広い業種から関心を寄せられているという。

情報源には現地政府がもっている公式データも含まれる。大場CEOは日々、世界中の新興国などを飛び回り、オフィシャル情報の提供と活用に関する協定を各国と締結している。

「途上国、新興国はリソースが足りないため、外国からの投資や企業進出を呼び込むことが政府の優先事項になっています。一方、海外企業が投

人口減少著しい県北で起業し、インパクトを与え、課題解決に挑むのは、非常にやりがいのあること(大場CEO)



茨城大学 応用理工学野 新納 浩幸 教授

東京工業大学大学院情報科学研究科修了(修士)。富士ゼロックス株式会社、松下電器産業株式会社を経て、1993年茨城大学工学部に着任。1997年博士(工学)を取得後、現在に至る。専門は自然言語処理、機械学習。

株式会社 KiAI CEO 大場 一雅 さん

これまで世界銀行グループ、三井住友銀行、OECD、在米日本大使館、国際労働機関、みずほ証券で活躍し、世界の各地域での駐在経験をもつとともに、データサイエンスとAIにも精通。フランスのバリ第一大学人文社会科学学修了。

資や進出の意思決定をするには、それに足る情報が必要なのですが、新興国はそうした情報を出すのにもリソースが限られているのです。そこで我々が必要な情報を特定し、着実に成果につなげていく。各国ともそれに期待してくれています(大場CEO)

とはいえ各国が出している情報は、様式も質もバラバラだ。それを最適化するのが、新納教授が手がけてきたAIの技術。「フォーマットにばらつきがあってもAIで必要な部分を取り出せるよう、裏側の仕組みを開発しています。一旦英語に翻訳してから前処理をして、さらにカテゴリと結びつけるプロセスももちろんAIがやっています」と新納教授。全国各地に国立大学があり、こうした技術をもった研究者や卒業生が身近にいるということが、地方でもスタートアップの活躍を可能にする。

KiAIの注目は加速度的に高まっている。アメリカのベンチャーキャピタルである「500 Global」や

スタンフォード大学の「StartX」といったアクセラレーションプログラムにも採択された。同社の成長は世界とつながる「日立」の新たな光になりそうだ。

株式会社 KiAI

2023年9月設立。「すべての人にグローバルなリターンを届ける」を目標に、途上国・新興国に進出する企業を支援する事業に取り組んでいる生成AIスタートアップ企業。ビジネス情報配信サービス「KiAI」を提供している。https://kiaifund.com/



新納教授が語る、事業参加による研究・教育への好影響

KiAIのビジネスに関わることによって、研究にも教育にも明らかにポジティブな影響が出ています。それまでは論文ばかりを追いかけてきたところがありますが、論文の場合はたいいてい実験的にプログラムを動かしているだけなので、実際の社会の現場でどうなっているかは実は分かりません。ユーザーにどう届いているかというフロントエンドの部分は勉強したこともないですから。それが、市場のニーズを踏まえながらアルゴリズムを開発していくとなると、最先端のところ

を追いかけていかなければならない。トレンドとなっている製品だとか、今企業はこうしていることをウォッチできるようになって、そこから研究のヒントをたくさん得ることができています。学生に教える上でも、そうした知識があればもっと良い教育ができると実感しているところです。私の研究室の学生たちもインターンシップで参加して、「大学で学んでいることが社会で役立つという手ごたえをやっと感じる事ができた」と話しています。(談)

博士号を持つ大学や企業の研究者が、私たちの顧客。技術を持つ工学部の卒業生にこそ、ぜひ営業に挑戦してほしいです



鈴木社長の隣は、茨城大学で研究員を務めた経歴をもつ技術開発部の浅本グループリーダー

エフシー開発株式会社 代表取締役

鈴木 朗弘 さん

1995年茨城大学工学部システム工学科を卒業。1997年英和株式会社に入社。2006年12月よりエフシー開発株式会社の取締役に兼務し、2019年9月より現職。

「研究・開発」「設計・製造」「販売」を完全に機能分担したことが奏功。

日立キャンパスのN5棟の玄関をぐぐり左に進むと、「エフシー開発株式会社」という看板が掲げられたオフィスに行きあたる。大学の構内に拠点を構える同社は、何を隠そう、茨城大学発ベンチャーの「老舗」ともいえる存在だ。

創業は2003年。「セル」と呼ばれる燃料電池の評価に必要なデバイス装置を取り扱う。「その当時、企業や研究機関では、それぞれバラバラの仕様のセルを使って燃料電池の研究をしていたんです。日本の燃料電池研究の加速化を図るため、それを標準化しようという動きが出てきたんですね」。そう振り返るのは、現在社長を務める鈴木朗弘氏。茨城大学工学部の卒業生だ。

この動きを受けて喫緊で必要となったのが、セルの基幹部品となる膜電極接合体(MEA)の調達だった。当時、茨城大学工学部の堤泰行教授がその技術を有していた。「ところが大学としてその技術や部品を販売するスキームがなかったんですよ」と鈴木氏。しかし、思いがけない時の巡り合わせが訪れる。国立大学の法人化などが行われた小泉政権の時代。政府は大学発ベンチャーを立ち上げる支援に本腰を入れ始めており、茨城大学も産学連携のセンターをつくっていた。そのセンター長を務めていたのが、堤教授だった。「『それならベン

チャーを立ち上げよう』ということになり、複数人の出資で設立されたのがこのエフシー開発です」。

鈴木氏は三代目の社長で、当時は提携企業の社員という立場だった。大学発ベンチャーという形で果たしてうまくいくのか、やや懐疑的だったという。「口座を開いて取引契約を結び、納期までに製品を納める——そういうビジネスの慣習や仕組みが、大学にはなく、馴染みにくい側面がありますので。しかも技術に自信を持っている研究者は、お客様から寄せられる現場の声もなかなか聞かないですから(笑)」。この状況を突破すべく、研究・開発は大学、設計・製造はエフシー開発、販売は英和株式会社という形で完全に役割を分けた。鈴木氏曰く、これが功を奏したという。

燃料電池は化学反応を利用した発電機だ。蓄電機能は持たない。ハイブリッド車が成功し、一躍

燃料電池の研究開発支援に携わりすでに20年余り。世代交代をはかり、さらに先の未来を目指す。

エフシー開発 株式会社

脚光を浴びた時期は、燃料電池ではなく蓄電池の方に需要が傾き、閉業の危機にも直面したという。しかし東日本大震災がターニングポイントとなった。突如起こる大規模な停電。自ら発電できる燃料電池の価値が改めて見直されたのだ。さらに現在はクリーンなエネルギーとしての水素の需要が高まり、燃料電池の技術を応用して、電気を使って水素を生成する技術への引き合いが大きくなっている。「茨城大学も気候変動対策やカーボンリサイクルに力を入れているので、もっと連携を強めたい」と鈴木氏は語った。

創業から20年あまり。課題は世代交代、技術継承だ。「創業時の技術者が80代になって頑張っていますが、若いメンバーが必要です。大学構内にあるので学生みなさんに興味を持ってもらって、一緒に働いてくれると嬉しいですね。私たちの顧客は博士号をもった大学や企業の研究者なので、専門的な話ができることが大事。技術をもった工学部の卒業生こそ、営業やマーケティングにも挑戦してほしいです」。



エフシー開発 株式会社

燃料電池のセルの製造や性能評価、製作技術トレーニングを行っている。「エフシー(FC)」は「Fuel Cell(燃料電池)」の略。2003年、茨城大学と地元企業、英和株式会社の協力で設立。
https://www.fcdevelopment.co.jp/

茨城大学で起業家精神を身に付けるなら！

ベンチャーや起業に興味があるという学生みなさんには、全学共通のiOPプログラムのひとつになっている「アントレプレナーシップ教育プログラム」がおすすめです。1年次はビジネスや経済への基礎理解を深める入門講義、2年次にかけて経済・経営・情報等の専門科目を履修するとともに、ビジネスプランコンテストへの参加などの課外活動を体験します。3〜4年次になるとiOP(Internship Off-campus Program)としてインターンシップや新たなプロジェクトの企画立案に挑戦します。

創立75周年・創基150周年記念
みんなの“イバダイ学”シンポジウム

イバダイの
価値を問う

開催。2025年3月22日(土) 13:30→17:00
茨城大学水戸キャンパス 人文社会科学部講義棟
主催：茨城大学

科学史家・隠岐さや香氏を迎え、
14名の教員と100人の聴講者が
熱く議論を交わした日。

2025年3月22日、茨城大学創立75周年・創基150周年を記念した取組みとして、「みんなの“イバダイ学”シンポジウム『イバダイの価値を問う』」が開催されました。会場には約100人が足を運び、科学史家の隠岐さや香さんによる基調講演のあと、教育、研究、地域の価値という3つの切り口ごとの分科会に分かれ、若手・中堅・ベテランの教員が一緒になって議論を展開。参加者のみなさんからもたくさんのコメントや質問をいただきました。

隠岐さんは「今、日本の大学が世界のためにできること——地域から発信する平和と自由のための教育・学問」と題して講演。「平和というのは自分にとってもチャレンジングなテーマですが、世界が異常なほど不安定な感じになってきた中、地方・地域と平和という視点で考えたいくなりました」と述べて講演が始まりました。

プログラム
第1部 基調講演と論点
基調講演 「今、日本の大学が世界のためにできること——地域から発信する平和と自由のための教育・学問」 隠岐 さや香 氏（東京大学大学院教育学研究科教授／科学史家）
論点提示 「国立大学、茨城大学の現状と議論のポイント」 佐川 泰弘（茨城大学 理事・副学長）
第2部 分科会：大学の価値を問い直す
分科会① 「テーマ」大学教育は何をめざすのか——「文系」「理系」を越えるビジョン 西川 陽子（モデレーター）／松尾 卓磨／横山 淳／梅津 信幸
分科会② 「テーマ」「よい研究」とは何か——社会的価値と学問の自由 倉本 繁（モデレーター）／迫田 翠／長 真啓／西山 國雄
分科会③ 「テーマ」イバダイの実践と育まれた地域の価値 青柳 直子（モデレーター）／高橋 修／生越 達／小針 大助
第3部 総括
報告とパネルディスカッション：イバダイの価値を問う 西川 陽子／倉本 繁／青柳 直子／金野 満／隠岐 さや香 氏／佐川 泰弘（モデレーター） 学長による総括 太田 寛行（茨城大学 学長）



科学史家の隠岐さや香氏。ノーベル賞を例に「地方だからこそ意味のある国際的発信がある」と語った。

第1部 | 基調講演
今、日本の大学が世界のために
できること—地域から発信する
平和と自由のための教育・学問

ほんの4日前ぐらいまでノーベル賞とゆかりの深いスウェーデンに出張していました。ストックホルムで生まれたアルフレッド・ノーベルは、兵器や爆薬の開発に従事して莫大な利益を挙げたこともあり、晩年、遺産の運用益を人類のために貢献した人たちに賞の形で配分することを遺言にしました。ノーベル賞の5つの賞を選ぶ主体はそれぞれ違いますが、そこにはノーベルなりの配慮が働いているようです。このうち平和賞はスウェーデンではなく、隣のノルウェーの国会が選ぶことになっています。当時はスウェーデンの王様がノルウェーも治めていて、ノルウェー人は不満をもち、独立したがっていたことから、平和賞を選ぶ主体としてはふさわしくないという感覚をノーベルが持っていたようです。その後2度の大戦があったにも関わらず、一人の私人の願いをもとにした国際賞が100年以上有名であり続けるのはすごいことです。その理由については科学史の業界でもよく話題になりますが、ノルウェーとスウェーデンという土地柄が良かったのだらうという結論が比重を占めています。ヨーロッパの一地方といえなくもない地域から科学や平和を発信した、そのポジションがちょうどよかったのだと。地方だからこそ意味のある国際的発信があるのだということに、最初に着目しておきたいと思います。

私は——物議を醸すかもしれませんが——日本は「田舎」だと思っています。国際社会の中で田舎。日本だけではなく、冷戦崩壊後、「中心」がなくなり、世界各国の地方化、田舎化がもたらされている。それでも今、アメリカがビジネスや科学の中心たる都

会だとするなら、実はその都会こそが政治的な対立などの危機に晒されているということです。今後都会が消滅するとき、もともと田舎だった日本、あるいは日本の大学は、良品田舎でい続けられるのか。それがこれから議論したいことです。

さて、大学とはそもそも何か。大学＝universityと呼ばれるものは、ヨーロッパの12世紀頃から始まりました。それまではあらゆる知的なことは身分や職業の枠内で行われるか、教会が担っていたのが、そこから自由に自分たちで学びたいことを学びたいという集団が出てきて、組合みたいなものを作ったのが大学の始まりです。教会や地域社会からは警戒される中、世界各地から人が集まり、自分たちで学びたいものを決める。それが大学の基盤にあるわけですね。

大学ができると学問分野が発展していきます。18世紀の「百科全書」という本に記された分類では、文系・理系という区別はまだあまりなくて、「哲学」の下位分類に、一般形而上学とか神の学、人間の学、自然の学などと書いてある。ここで人間の学と自然の学という分かれ方をしているのがポイントです。

神について考えなくてもいいという時代になると、かつての神のように自然を完全に把握するのだと言うと自然科学の学問になり、神が人間の世界に定めていた秩序を人間が作り替えてもいいのだと言うと人文社会科学的なものになってくる。人間はバイアスの源泉だから大量観察して機械で記録し、なるべく正確に自然の現象を把握しようという学問の方法を取るのが自然科学。一方、人文社会科学部は、人間の考えることを中心に物事を組み立てていこうとする学問で、これはある意味で普遍性よりも個性、「違う」という価値を大事にしています。

ですから大学は、非常に異なるものをまとめているおもしろい集団なんです。したがって大学は共同



講演に聞き入る会場の様子

体であるという点を大事にしていくなかにはないかと思っています。そして共同体である以上、集金マシンになってはいけなく常に思っています。

ここで我々がどうい問いに直面しているかという、大学は共同体ですが、学費が上がりすぎると共同体であることが難しくなるという側面があります。学費の高い大学というのは、いわば知識や学びといったものを商品として買うような組織に近づいていくわけです。アメリカの大学の経営論のコースでは、学生は自分の将来のために大学という場所に行き、教育をサービスとして買うのだという発想が強い。一方、例えば公費負担を原則とするスウェーデンモデルでは、知識はみんなで無料で分け合うものであり、その公共の場所である大学は無料であるべきだと。大学の起源からすると後者の発想が強いのですが、商品としての知識というのも完全には否定できず、難しい。今世界中で学費が非常に高くなってきていますが、大学はどういう場所なのかということ立ち止まって考えなければいけない、そういうタイミングに来ていると思います。

最後に、今、日本がどういうところにいるのかということに触れます。現在は国際的な学問の自由の危機の時代といわれています。学問の自由を測る指標では、冷戦の頃と同じくらいになってきている。ところが、最新のレポートでは日本の順位が良い方に変動したんですね。これまで日本の順位はあまり高くなかったんです。2023年の段階だと179カ国のうち、下から数えて3～4割の位置。それが今年はなぜか急上昇して上位3割～4割に入っています。まだきちんとした分析はできていませんが、例えば最近西洋諸国ではパレスチナの問題などで厳しい言論統制がかかっていたのに対し、日本はそうした規制の雰囲気から免れていたということも関係しているかもしれません。

学問の自由の指標で日本は確かに低空飛行を続けてきましたが、一方で激しい変化をしていないグループでもあるのです。欧米諸国やインドといった地域は軒並み悪くなっていて、実際に学者が訴えられたりすることが増え、自由に発言しづらい雰囲気があります。それに対し、日本は急に政治不安が起きて言論の自由、学問の自由が抑圧されたということは起きていない。ですから、これをそのまま保てるかどうかは実は大事なのです。それは何もしないという意味ではありません。むしろ、かなりきちんと考えていかないといいけない。

かつて「イノベーション」という言葉は、断絶すぎる変化という悪い意味で使われていました。17世紀の哲学者・ベーコンは、「大革新（＝イノベーション）を行っているものは、時間そのものの例に倣うとよいだろう。それはどんどん新しくなるわけだが、しかし静かに、そして徐々にするのでほとんど気づかれない。変化を引き起こすのは、改良のふりをした変化への欲望ではなく、改良しようとする意志であるように気をつけておくとよい。そして最後に、新規なことは、拒絶されてはならないが、疑惑的であるようにするのがよい」と言っています。時間は確かに流れているものの、流れていることにはほとんど気付けない。そういう「静かなイノベーション」にこそ、大学と地域社会が一緒に何かを考えていく秘訣、あるいはこれから未来を考える希望があるのかなと思っています。常に大学という場所は、原点に立ち戻って疑いながら考えていく場であるのではないか。そして、今が苦しい時代からこそ、世界の片隅、田舎のような場所から自由な対話を呼びかけるということが大事だと私は思っています。そのときに、静かなイノベーションというものを考える、提案していくということが、地方から、あるいは日本から、大学が世界のためにできることであると考えている次第です。

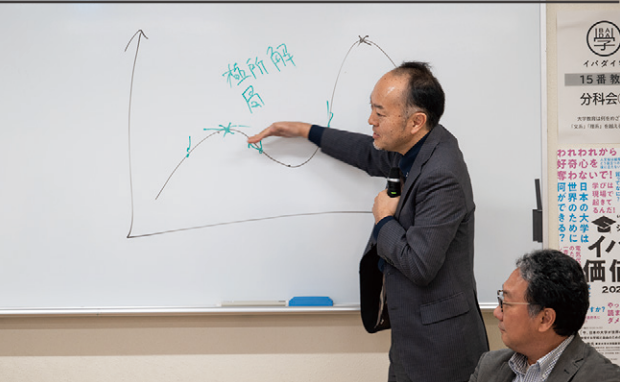
第2部 | 分科会
大学の価値を問い直す
第3部 | 総括

第2部の分科会では、分野・世代・ジェンダーの壁を超えた茨城大学の教員メンバー計12人によるディスカッションを行いました。

分科会①では大学の教育をめぐる「質」について、文系・理系の違いも踏まえて議論を展開しました。



パネルディスカッション



上) 分科会①、中) 分科会②、下) 分科会③での風景

「地方国立大であっても先端的な知の探究に触れることができる」（横山教授）。それを「少人数」の教育で進める環境をいかに実現・継続していくかが重要という意見で一致しました。

分科会②では、研究の価値、茨大で研究することの価値、よりよい環境づくりを議論。若手教員が置かれている厳しい研究環境の実態も語られました。お金を獲得しやすい研究も実際には蓄積があったこと。「好奇心をもって取り組めるものへの尊重がまずは大事」（倉本副学長）。

分科会③では、大学の教育・研究の資源を活かしながら、茨城県内の各地の専門職やその周囲に関わる市民たちとの関係を丁寧に紡いでいる教員たちが、それぞれの活動を報告しました。それはまさに茨大の価値といえますが、属人性を超えていかに継続できるかが課題のようです。

第3部は各分科会での議論を全体で共有した上で、隠岐さんも交えて議論を展開しました。「有用性一辺倒ではいけない。なぜやるのかを問い続け、論争できるのが大学でもある」と佐川副学長。最後に太田学長が、「大学は、何かを感じてもらえる場所、またピンとくるものがあつたときに次の方向性のヒントを与えられる場所でありたい。私たちは私たちの道があると思っている」と総括しました。



総括する太田学長

ACADEMIA IBADAI

知のプラットフォームとしての
茨大のよりディープな側面を、
さまざまな視点からご紹介します。

COLUMN

研究に恋して

教育学野准教授 田原 敬

学校も日常も思い切り楽しめる毎日へ。
“聞こえづらい”子どもたちの
見えない負担や疲労を
可視化する方法の確立を目指す。

一見すると、問題なく授業を受けているように見える子どもが、実は大きな負担を強いられているかもしれない。そしてその頑張りによって、本人も気付かないうちに心身を消耗しているかもしれない。そんな視点から子どもの聴覚障害を捉え直すのが、田原敬准教授の「リスニングエフォート(LE)」と「リスニングファティーグ(LF)」に関する研究だ。

田原准教授は、筑波大学の学生時代にたまたま履修した授業で「自分に向いているかもしれない」と感じたという。聴覚障害のある妹との関わりがあったからか、授業の中で唯一、聴覚障害のある先輩と自然にコミュニケーションが取れた。同時期に受けた聴覚障害に関する講義では、「体験として知っていたことが、初めて学問として理解できた」。さまざまな要因が重なり「これは天職なのかもしれない」と直感。聴覚障害児の支援は田原准教授のライフワークとなっていった。

LEは聞き取りが難しい状況で、集中を高めて聞き取ろうとしたり、聞き取れなかった内容を推測したり、聴覚以外の認知機能も総動員して話を理解しようとする行為。LFは、そのLEによって引き起こされる疲労感のこと。エフォートによるストレスが疲労につながり、疲労によってさらに聞き取りが困難になる。するとまたエフォートを強いられる。聞き取りに割けるエネルギー量がどれくらい残っているのかを表すリスニングバッテリーという考えもある。

「昔から、通常の学級に通う聴覚障害のお子さんって寝るのが早いとか、1時間寝ないと次の活動ができないと言われていました。『これで説明できるな』と思っています」。人工内耳や補聴器など機器の発達と、脳波を使った聴力検査での障害の早期発見・対応などにより「聴覚障害は“聞こえない”障害というより“聞こえづらい”障害に変わってきている」。田原准教授は、通常の学級で学ぶ聴覚障害児の約半数が



必要な支援を受けられていない可能性を指摘している。

通常の学級に通う聴覚障害のある子どもを対象とした調査の中には、約6割が「全く問題がない」と回答しているものもあるが、「全てを信じて良いのか」と指摘する。本人は「問題なく」聞こえていると思っていても、その裏では、知らず知らずのうちに無理をしているかもしれない。そうした頑張りが積み重なれば、疲れがたまり、学校に行くのがなんとなく億劫になったり、勉強への意欲が続かなくなったりすることもある。そもそも自分がどれくらい頑張っているのか、ほかの人とどう違うのかを確かめるのは難しく、「本人も周りも自覚がなく、『しんどい』状態が当たり前になっている。このことをしっかり理解する必要がある」。

では、どう支援していくのか。そのためには、まずLEを評価しなければならない。方法はアンケートや身体データの活用などがある。アンケートは手軽な反面、疲れを自覚していないことが多いこの問題では信頼性が下がる。瞳孔の開きや心拍数を測る身体データは正確な一方、専用機器などが必要だ。

そこで、田原准教授が検討中なのは簡単な実験による評価。たとえば、数字音声聞き取り、回答を素早く入力するというもの。聞き取りの難易度を変えて何度か行くと、回答の正確さに比べて反応時間がどんどん遅くなっていく。この差分を聞き取りに要したエフォート

＝LEと捉えることができる。ただこちらのデメリットは、実験室での状態しかわからないこと。慣れない場所では固まってしまう子や、途中で聞き取りを諦めてしまう子などの日常生活でのLEがわからない。「どういう方法がいいのか？」というのをさらに研究しているところ。特に学校でどういう評価ができるかを考えていきたい。

茨城県内の学校と協力し、すでに支援に取り組んだ事例もある。ある軽度難聴の中学生は、問題なく授業を受けていたが、午後に向けて疲労が溜まり、学校が終わるとぐったりしていた。しかし、授業に字幕を表示したところ、午後の疲労が軽減された。帰ってから、友人と遊んだり、ゲームをしたり、テスト勉強をしたりする余裕が生まれたそう。だ。「付度してくれてるんじゃないかと心配」と前置きしつつ、「学校の生活はもちろん、中学生は帰ってからの生活も大事。そこでも活動できるエネルギーが残ったとしたら、本当に望ましい」とはほほ笑んだ。

PROFILE

田原 敬(たばる・けい)

福岡県生まれ。筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程修了、博士(障害科学)。筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター助教などを経て、2016年度茨城大学に着任。2020年より現職。2022年から1年間、デンマーク工科大学客員研究員。専門は教育オーディオロジーや主に聴覚障害児を対象とした生理心理学的研究。

COLUMN

イバダイと地域力

—— 知でつながるコミュニティ

茨城県立
勝田中等教育学校 × 茨城大学

多様なみんなが
安全に幸せに暮らせる社会へ。
地域の外国人と住民と一緒に学べる
「防災運動会」を開催。

自宅に一人で過ごしていると、突然携帯電話から警告メッセージが流れ始めた。耳にしたことはある言語だが、意味まではわからない。その後、足元が揺れ出した。ひたちなか市に住むインド出身のモナ リザさんが体験した地震。数秒の小さな地震だったが、「どうしたらいいのかわからず、怖くて外に出て様子を見に行きました」。夕方、帰宅した夫に職場の避難訓練などで学んだ防災知識を教えてもらった。防災グッズを備え、いつでも潜り込めるようテーブルの下を空け、自宅から一番近い避難所をメモした。対策を講じ、ようやく恐怖が和らいだ。

ひたちなか市に住む外国人は2616人(2024年12月31日現在)で、3年前と比べ900人弱増えた。家族で暮らす世帯も多い。モナさんの夫のように防災に関する研修を受けた人ばかりではなく、日本語の防災情報を瞬時に理解し適切に対応することは難しい。

そんな海外にルーツを持つ方と地域住民と一緒に楽しく防災について学べる場が、「防災運動会」だ。2024年12月8日、勝田中等教育学校体育館で開催され、地域に住むインドやペルーなどさまざまなルーツを持つ40人と日本人90人が集まった。同校と茨城大学との共催で、運営には、学生も加わった。

防災運動会では、防災をテーマにしたレクリエーションや実践ワークショップが多数行われた。「Emergency Whisper Game! 急いで伝えろ 伝言

ゲーム」は、適切な災害対応を伝えるゲーム。言葉でもジェスチャーでもOK。走のような動作をしながら「Higher!」と叫ぶ人もいれば、手で山のような形を作る人もいた。最後は海外にルーツを持つ方が、状況と合うカードを選ぶ。これは「高台へ逃げて!」のお題だ。ほかに新聞紙でスリッパを作った



組み立てたダンボールベッドについて意見を交わす参加者

り、避難所で使用されるダンボールベッドを組み立てたりと、さまざまな種目が用意された。ハラル対応非常食の試食も行われた。

運営にも協力したペルー出身のメラニー アリソンさんは「外国人にも日本人にも勉強になったと思う。言葉の壁は消せないけど、なんとなくコミュニケーションができた」と評価。「茨城大学は留学生がいて、一般の人より外国人への理解があり困りごとがわかると



がれきに見立てた足つぼマットの上を、新聞紙スリッパで歩く参加者。手にはタオルで作った担架

思うので、解決策を生み出しやすいのでは」と今後の展開を期待する。

防災運動会開催のきっかけは、茨城大学グローバルエンゲージメントセンターの瀬尾匡輝准教授と同校とのつながりだ。瀬尾准教授は数年前から同校

思っていたこと。参加者に満足してもらおうと急いでもっとと振り返る。飛松さんは、茨城大学内で開催するiOP-AWARDで防災運動会の取り組みを発表し、優秀賞を獲得した。

大学との共催で「イベントに磨きがかかった」と話すのは、勝田中等教育学校側リーダーの一人、尾方心さん(中等4年、当時)だ。「多文化共生に詳しい瀬尾先生がサポートくださって、統率や賢い出しの面で大学生の力もとても大きかった」と振り返る。

今後も地域に暮らす外国人は増加するとみられ、防災運動会のような取り組みの重要性はますます高まる。2024年6月に改正出入国管理法が可決され、外国人技能実習制度の廃止と、育成就労制度の新設が決まった。新制度は人材の育成と確保を目的としているため、入国時点で専門性や技能を求めず、現場での経験を通じて技術を磨く。特定技能2号の試験に受ければ、永住や家族帯同もできるようになる。

改正法の施行日は未定だが、瀬尾准教授は「特定技能(2号)に進む道が大きく開かれている。家族と一緒に暮らす方が増えていく」と予測。さらに「転籍も可能になるため、まず地方に来て、経験と日本語力を上げて給与の高い都市に流れていくルートができると考えられる。一緒に暮らしたいと思ってもらえる地域作りが必要」として、外国人がが少ない地域でも支援体制を充実させる重要性を強調する。「防災運動会はまさにそういった取り組み」だ。

外国人が安心して暮らせる地域づくりには、取り組みの継続が重要だ。国際交流協会や、住民のつながりを保つ役割の方々が高齢化していく中で、今回の防災運動会は中等生が発案で始まり、学生も運営に携わった。「若い世代から動き出しているひたちなか市は、本当に夢が持てる」。次回以降の開催計画も、すでに動き出している。

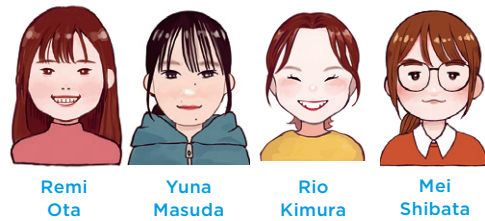


上) 大学内にある聴覚検査室での検査風景。左下) 大小の観葉植物が置かれた研究室で取材に応じる田原准教授。右下) かつて妹さんが言語指導で使用した絵日記を教材として保管している。

全力！茨大サーフルライフ！

サークル・部活動で輝く茨大生たちにインタビュー！

今号からスタートした新コーナーでは、「大学ならではの」のサークル活動や部活動に熱中する茨大生に注目！設立2年目のフレッシュなお笑いサークル『WARAIBA』を中心に、茨城大学のサークルで新しく活動を始めたという皆さんに話を伺いました。



自分たちが主催するお笑いライブとは全く違う雰囲気なんですね。

S阿部 1回戦からM-1独特の雰囲気がありました。茨苑祭とか新歓祭で披露したときは、場の雰囲気があったかいて思いましたね。

校内ライブやラジオ配信などでも活躍していますね。WARAIBAとしての目標を聞かせてください。

S阿部 WARAIBAの目標としては、新入生をたくさん呼んでより活気のあるサークルにすること、M-1グランプリ以外の賞レースにも参加すること、です。
無限 猪狩 M-1グランプリ3回戦に出場することです。

YSカナタ M-1グランプリ3連覇です！

S鶴見 M-1グランプリ5連覇です！（笑）

最初から最後まで笑いの絶えない取材でした。WARAIBAでは演者だけではなく裏方も募集中だそうです。興味のある方は、ぜひ下記から問い合わせしてみてください！



部員数26名／2024年発足

問い合わせ WARAIBA公式インスタまたはXから問い合わせてください。
@egao_iba

力に頼らずに身を守る術を磨く 少林寺拳法部



理学部2年
椎木千愛さん

入部体験で力に頼らない技術のかっこよさに感動し、この部活で『身を守る力』を身につけようと決めました。未経験でも賑やかで明るい雰囲気のなか、楽しみながら技術を身につけられます。

部員数10名
1977年発足

問い合わせ インスタまたはXにDMでご連絡ください。
@ibadai_shorinji

楽しく安全に海を楽しむ ライフセービング部



理学部3年
大屋敷颯太さん

この人たちとなら何をしていても絶対楽しい！と思えるような先輩方に出会えました。夏は仲間と泊まり込みでパトロール。年間を通して様々な活動に全力で取り組む最高に楽しい部活です！

部員数24名
2005年発足

問い合わせ インスタのDMにご連絡ください。見学・体験はいつでも大歓迎！ @ibaraki_slsc

みんなの気持ちを照らす存在に Cherry's (チアー)



教育学部3年
加藤花菜さん

茨苑祭で見たチアーのステージがキラキラしていてとっても可愛くて、ずっと憧れていたので入りました。見ている誰かを元気づけ、明るい気持ちにさせる活動ができるサークルです。

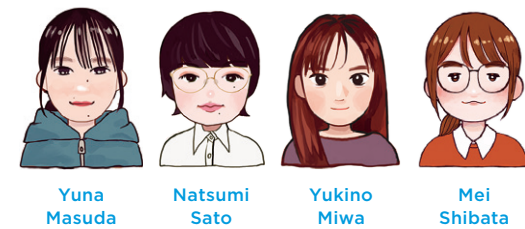
部員数21名
2008年発足

問い合わせ 毎年春にメンバーを募集します（現在、見学・体験は一時停止中）。 @ibaraki.cherrys

茨大ほつとステーション

茨大生の暮らしを支える熱血茨大サポーターズをご紹介します！

私たち茨大生の生活を支えている学内外のさまざまな人物にインタビュー。茨大生との関わりや想いを伺いました。



地域に根ざし、地域を越えて人気を広げる専門店。 サザコーヒー 茨城大学ライブラリーカフェ

SHOP DATA 茨城県水戸市文京2丁目1-1／10:00～17:00（L.O. 16:30）・土日祝定休



茨大図書館棟1Fに入る人気コーヒー店。店長の西野千里さんに、おすすめのメニューなどを取材しました。

茨城大学のキャンパス内、図書館の1階には「サザコーヒー 茨城大学ライブラリーカフェ」が入っています。サザコーヒーは、自社焙煎コーヒー豆の製造・販売をはじめ、お菓子の製造販売も行う会社で、各店舗では世界各国のコーヒーやさまざまなお菓子を楽しむことができます。現在では、茨城県内を中心に、東京や埼玉にも複数の店舗を展開する人気店となっています。

店内は黒と茶を基調とした内装で、壁にはコーヒー生産国の織物モラが飾られたり、かつてコーヒーの抽出に使われていた機器が展示されたりと、落ち着いた雰囲気の中、お客様にコーヒーを五感で味わってもらうためのこだわりが随所に見て取れます。

店長の西野さんのお勧めのコーヒーは「パカマラ」という品種。パカマラは

突然変異種同士の掛け合わせで生まれた、苦みのあまり無い、紅茶のような味わいのコーヒーだそう。西野さんは初めて飲んだ時、「これ、コーヒーですか？」と当時の店長に聞いたくらい、衝撃を感じたそうです。そのパカマラにも合うお勧めのフードは「茨大パン」。この店舗限定のメニューで、外側はクロワッサン、内側はベーグルの生地を使用したカリカリ、もちもちのパンです。他にも、「ココア」や「將軍カフェアテ」、カステラ生地を使用した「ショートケーキ」などメニューは豊富で、とくにコーヒー好きには岡倉天心に因んで茨城大学と共同開発した「五浦コーヒー」が、甘めの飲み物が好きな人には「サザいちごシェイク」が人気だそうです。

「キャンパス内に店舗があるので、ぜひ茨城大学に通っている間に、茨城県発祥のサザコーヒーでいろいろなコーヒーの風味を味わっていただけたら」と西野さん。ぜひ皆さん、足を運んでみてください！



左) 店舗外観。レンガ造りの建物にサザコーヒーの黒のサインが調和してシックな雰囲気。右) 店長の西野千里さん。コーヒーやフードのことを詳しく説明してくれました。

丁寧な対応と迅速な修理で茨大生の“移動”を支える サイクルワールドおおたか 茨大前店

SHOP DATA 茨城県水戸市袴塚3-9-13／9:30～18:00・日祝定休



春には新入生をはじめとした多くの茨大生で賑わう、アフターサービスにも手厚い自転車専門店です。

茨城大学正門から徒歩1分のところにある「サイクルワールドおおたか茨大前店」は、茨大生の貴重な移動手段のひとつである自転車の販売や修理を手掛ける店です。店舗での販売修理のほか、大学構内にも設置されている水戸市シェアサイクル「みとチャリ」の管理も行う、地域に密着したお店です。

お店のオープンには22年前。現在の店主・大高一康さんの祖父が始めた自転車店を、二代目である大高さんの父が現在の店名にし、大高さんが三代目を引き継いでいます。

この店の強みのひとつは、修理の迅速さです。「ママチャリ」と呼ばれるシティサイクルであれば、原則として当日中に修理してもらうことが可能。授業前に店舗に寄って自転車を預ければ、帰宅時には修理が完了して

いて乗って帰れる——これは茨大生にはありがたいサービス。店舗で購入した自転車の場合は、初回のパンク修理が無料になったり、修理代が割引になったりする特典もあります。大高さんにお勧めの自転車を聞くと、「ママチャリ」とのお答え。「ロードレーサー」などと異なり、いわゆる「ママチャリ」はメンテナンスをそれほどこまめにしなくても乗り続けられるのがメリットで、「流行りがなく、何十年も変わらない形は、ひとつの完成された自転車といえる」のだそうです。

自転車に乗る茨大生へのアドバイスとしては、「2か月に1回はしっかりとタイヤに空気を入れてパンクを防ぐこと、盗まれないように自転車のカギをしっかりとかけること、イヤホンをしながらの運転は危険なので決してせず、交通マナーを守って楽しく乗ってください」とのこと。皆さん、自転車で何か相談や困ったことがあれば、授業前に店舗に寄って自転車を預ければ、帰宅時には修理が完了して



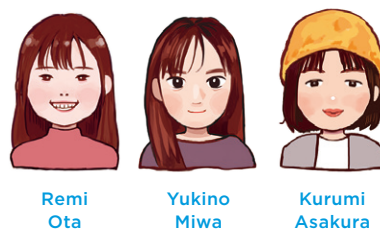
左) 茨城大学構内に設置されている「みとチャリ」。右) 店主の大高一康さん。自転車の悩みはなんでもご相談を。店舗で自転車を購入すると、パンク修理も割安の800円に。

先生、いいですか？

～茨大教員の素顔を調査！～

茨大教員約600人の中には意外な趣味や特技を持つ人物が…？！

大学は小中高と比べると一人ひとりの先生と関わる時間が少ないと感じている人もいるかもしれません。このコーナーでは茨大の先生たちに、自身の学生時代の話や趣味、学生への向き合い方などについて聞き、より先生たちの「素顔」をお伝えしています。皆さんと先生との距離を縮めるきっかけにできればと思います！



雑談のおもしろさに定評あり。アイドルの“推し活”も実践中。



先生の講義を受講した際、合間に話される雑談がとてもおもしろかったことが印象に残っています。中でも印象深かった社会人時代の話や推し活についてのエピソードを詳しく聞いてきました。

大学教授になる前に企業で働いた経験があるとのことでしたが、どのような仕事呢？

「NEC中央研究所で働いていました。心理学専攻の需要はなかったのですが、日常記憶の研究経験から職場でも研究できる環境を望んでいて、当時発展途上のコンピューター分野には心理学の可能性を感じていました。就職活動の際にはショールームに通い自分なりに製品の改善点を発見し、レポートにまとめ人事に送ることで、心理学を学んだ自分の必要性をアピールしました。働き始めてからも、職場では理系のすごいテクニックを持つ人たちがプログラムを作る中、同じことを目指しても到底勝ち目はないので、彼らとは異なる視点をもって、価値あるアイデアを生むことを心がけていました」

先生の授業で、アイドルグループ「僕が見たかった青空」について熱く語っていた姿が印象深いのですが、応援を始めたきっかけは？

「知り合いの先生から、“早崎すずき”さんって言う僕の苗字が名前になっているアイドルがいると“布教”されたのがきっかけです(笑)。加えて、近年「推し活」をテーマに卒論を書く学生を担当する中で、「推し」にいくらお金を費やすかでファンの度合いを測るという文化に、自分とは異なる価値観や面白さを感じて実際に今の推し活を体験してみ

ようと思いました」

どのような推し方をされているのですか？

「デビューシングルは一番豪華な特典がついたセットを買いました。ただ、僕は心理学を学んだせいか、アイドルを追いかけて気持ちが高ぶる自分をつい客観視して行動にブレーキをかけてしまうところがあるようです(笑)。なので、実際には猛烈に追いかけるほどにのめりこめてはいないんです」

物事を分析しながら楽しむ鈴木先生。学生の視点を理解するために推し活もしてみるなど、学生想いな姿勢も再認識できた取材でした。



僕が見たかった青空・早崎すずきさんのアクスタ(左)。最近の推し、女子プロレスのNORIさんのもの。

ピンク好きはバラの花がきっかけ。今は中国ドラマ研究に没頭中。



いつもピンク色のアイテムを身に纏っている人文社会科学部の西野由希子先生。ピンクを好む理由や専門の中国文学に目覚めるきっかけなどについてインタビューしてきました。

西野先生といえば、ピンク色が印象的です。

「一時期、一生懸命にお庭のバラを育てていたことがあって、そのころに自分のテーマをバラにしようと思った。特にピンクや赤のバラが好きで、よく身の回りに置くようにしているので、学生さんたちにもピンクの印象を持たれているみたいです」

大学生時代はどのように過ごされましたか。

「大学の必修科目で出会った中国語が面白かったので、大学の授業に加えて、中国語の講座にも通っていました。初級の勉強が終わったころ、自力で中国語の小説が読めそうだと気づいたんです。新しい世界が広がった気がしました。翻訳されていない作品を自力で読んで、その作品について考える世界がとても新鮮だったんですね」

中国文学以外にも興味を持たれたチャイニーズカルチャーはありますか。

「北京大学に留学したときにもドラマのVCDを買って文学作品がどう映像化されて多くの人に興味を広がるかを含めて映像作品を見ていました。近年、ネットや配信で中国ドラマがリアルタイムで見られるようになったので、また追いかけて始めて、現在の中国ドラマの研究につながっています」

特におすすめの中国ドラマはありますか。

「『夢華録』です。男女差別のある宋代の中国で、助け合いながら商売をする3人の女性の物語です。中国の戯曲作品をもとに描かれていたり、宋代の芸術が映像に取り入れられたりと、伝統文化を現代のテーマの中に活かしていて、中国でも評価が高い作品です。古典への敬意と、現代を生きる人への激励を感じる名作です。ぜひ学生の皆さんにも見ていただきたいですね」

他にも、なぜ大学で働こうと思ったかなどについて興味深い話を披露していただき、いっそう親しみと尊敬の念が増した取材となりました。

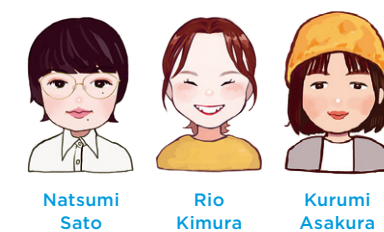


西野先生がおすすめする中国ドラマ「夢華録」

茨大関連施設にDIVE!

茨大のさまざまな関連施設を学生視点でレポート!

県内各地に所在する茨大の各キャンパスや関連施設の様子を学生視点からお届けします！第4回は茨城大学図書館(本館)へ潜入。高校の図書館や地域の図書館との違いについて、職員の方のナビゲートのもと調査してきました！



授業に必要な学術書を中心に100万冊を所蔵*

茨城大学 図書館

*水戸、日立、阿見の図書館3館の合計蔵書数

DATA 茨城県水戸市文京2丁目1-1

茨城大学水戸キャンパスの正門の正面に建つ、レンガ色の建物が茨城大学図書館棟です。蔵書冊数は約100万冊を誇ります(日立キャンパス、阿見キャンパスの図書館も含めた総数)。共同学習エリア(ラーニングcommons)やライブラリーホール、P.13で紹介しているサザコーヒーもこの図書館棟に入っているため学生にもなじみのある施設ですが、図書館の奥の様子まで知る人は意外に少ないかもしれません。

大学図書館は、通常の図書館とは少し異なり、主に授業に必要な本や教員推薦の本を所蔵しています。授業で推奨される本は相当数に及ぶため、それらを無料で手に取ることができる大学図書館は学生の頼もしい味方。読みたい本が見つからない場合はもちろんリクエストも可能です。何十年も前から使用されてきた目録カードやカードケースなどもあり、それらを眺めながら本を探していると、かつて同じ本を利用して勉強していた大学の先輩たちの様子までが浮かびあがってくるようです。



レンガの外壁とアーチが印象的な図書館の外観。書架や閲覧室に加えて自習室やグループ学習室、カフェテリア等も1つの建物内に整備されています。

DIVE

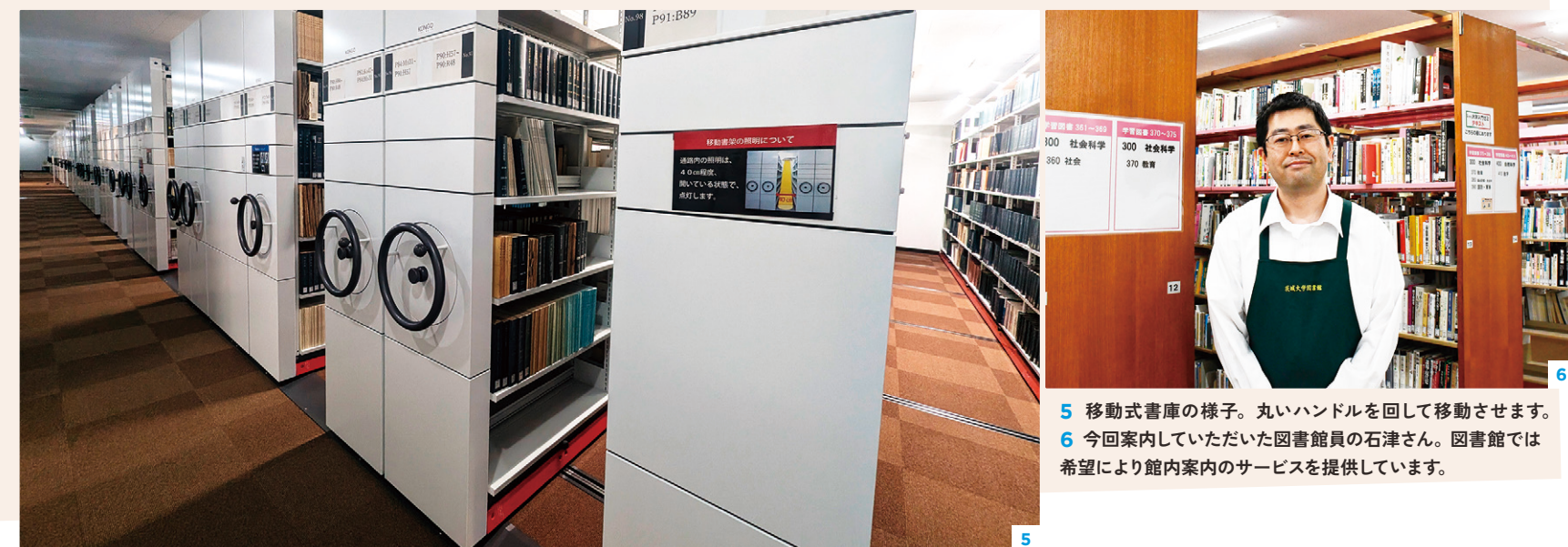
2階にある閲覧室をさらに奥へと進んでいくと、書庫があります。書庫は全部で7フロアあり、私たちの身長を超える高さの書架に膨大な数の本が並んでいます。東日本大震災を経て2014年にリニューアルオープンした際、館内の照明が節電の目的で人感センサー付きのものになったため、歩を進めるごとに照明がついていき期待感が高まります。

書庫の中には移動式の書架が並ぶエリアもあります。そこに収蔵されている本を読みたい時は、書架に付いているハンドルを自分で回して書架を移動させ、本を取ることができます。書架同士をぴったり合わせると、一つのハンドルを回すだけで複数の書架を一度に移動させることもできます。

書庫は、それぞれ本の内容によって分かれています。洋書だけが置かれている書庫もあります。「洋書は難しいかも…」と感じる人もいますが、短編から長編まで幅広く揃っているのも、ぜひ、英語の授業や資格取得のための学修に役立ててみてください。他に、絵本や新聞が揃う書架などもあります。新聞は、茨城県内のものだけでなく青森県や沖縄県などローカル紙(一部)を読むこともできます。このように、探していた本以外にも懐かしい本や興味を引く情報との出会いがあるのが、図書館内を探索するいちばんの魅力。大学図書館を有効に使って、自分の興味のある分野をさらに開拓していきましょう！



1,2 左の写真の左側に映っている棚を拡大したものが右の写真。本の管理を手作業で行っていた時代の名残です。3 絵本コーナー 4 県外の一部のローカル紙も閲覧できる新聞マルシェ。



5 移動式書庫の様子。丸いハンドルを回して移動させます。6 今回案内していただいた図書館員の石津さん。図書館では希望により館内案内のサービスを提供しています。

つながるイバダイバーズ

茨城大学の職員たちが、リレー形式で執筆するコラムです。

第4回 | 学部等支援部 日立地区事務課 青山 拓也

学生から大学職員へ——
キャンパスの“入口”で思うこと。

私はかつて、受験生としてこの大学に出会いました。初めて訪れたキャンパスは広く、どこか緊張感のある空気を感じながらも、「ここで学びたい」と思ったことを今でもはっきりと覚えています。その気持ちのまま入学し、4年間をこの大学で過ごしました。学生時代は、講義やゼミ、サークル活動、友人たちとの日々が中心でした。キャンパスは、私にとって“学びの場”であると同時に、“自分自身を見つけていく場”でもありました。思い返せば、そんな日常のなかで、自然と大学への愛着が芽生えていたのだと思います。卒業後、縁あってこの大学で働く機会を得たとき、「今度はこの

大学を支える側として関わってきたい」と思いました。そして今、私は大学職員として、かつて自分が通ったそのキャンパスの“入口”を支える仕事に携わっています。

入試の仕事は、想像以上に多岐にわたります。入試に関する問い合わせ対応、募集要項の作成、試験の運営、大学見学や説明会の対応など、年間を通じて常に準備と対応の連続です。特に、受験生や保護者の方々と直接やりとりをする機会では、かつての自分を思い出しながら、一つひとつの質問にできる限り丁寧に答えるよう心がけています。

入試は、大学と受験生の最初の接点

です。パンフレットを手に取ったとき、大学見学でキャンパスを訪れたとき、説明会で話をしたとき——その一つひとつの“出会い”の印象が、大学のイメージを形づくりま。だからこそ、どんなに忙しくても、どんなに小さな問い合わせであっても、ただの事務的な対応ではなく、「この大学は安心できる」「ここなら頑張れそう」と思ってもらえるような温かさを大切にしています。

もちろん、すべてが順調というわけでもありません。書類の不備、当日のトラブルなど、予期せぬ事態が発生することもあります。そのたびに、どうすれば受験生にとって最も良い形になるか、最善の対応を考えます。解決策を探っていく過程は、責任感と同時に大きなやりがいを感じられる瞬間でもあります。



学生だった頃には見えなかった大学の“裏側”を知り、支える側に立った今、自分が学生として経験してきた日々がこの仕事に生きていると実感しています。私自身がそうであったように、この大学に惹かれ、人生の新しい一歩を踏み出す受験生たちに、できる限りのサポートを届けたい。そんな思いで、今日も窓口に立っています。

PROFILE

青山 拓也 (あおやま たくや)

茨城県出身。茨城大学教育学部卒。学部等支援部日立地区事務課学務グループ(入試担当)。趣味は、ボルダリングとカラオケ。

IBADAI News *Update*

茨城大学の最新トピックをお届けします！

農学部協力のもと、
教育学部附属小学校で
稲作体験を実施。

乾いた田んぼに種もみを直接播く「乾田直播」でお米を作る取り組みが、茨城大学教育学部附属小学校でスタートしました。2025年5月16日、農学部の協力で、3年生約100人が校内の田んぼに種をまきました。



農学部教授の指導のもと、水をほぼ使わない「乾田直播」による米作りに挑戦する教育学部附属小の生徒たち。

高台に位置する附属小。校舎脇に田んぼがありますが、河川から水を引くことができないため、数年前まで水道水で稲作体験を行っていました。どうしても費用がかさんでしまい、「世界一高いお米」と呼ぶ人も。そしてついに、稲作体験自体が実施されなくなりました。

ただ、稲作体験は、植物の成長の様子や食事の大切さなどさまざまなことを学べる機会でもあります。教諭たちが復活させようと模索したところ、3月まで農学部で教鞭を執っていた黒田久雄名誉教授と、応用生物学野の林暁嵐助教が乾田直播の研究をしていることがわかりました。そしてこの取り組みが実現しました。

種まきをする前に、黒田名誉教授が児童たちにお米の話をします。「みんな、田植えって見たことある？ 苗を田んぼに植えていくよね。今日は苗、ないんです。新しい技術で、種から播きます」。そう言って、赤い種もみを見せます。鳥などが食べないよ

う、薬剤でコーティングしているそうです。使うのは、「にじのきらめき」という品種。穂よりも稲の葉が高く育つため、「日傘を差しているようなもの」(黒田名誉教授)で、熱さに強いのです。

黒田名誉教授と林助教によれば、乾田直播の場合、お米の花が咲く時期～穂が出るまでは水が必要ですが、それ以外は基本的には雨水だのみで水やりは不要。慣行農法と比べ水の量は約1割程度で済むそうです。林助教は「イメージする田んぼとは違うと思いますが、固定観念にとらわれず、技術の面白さを感じて欲しい」と話しました。

長靴を履き、種もみの薬剤に触れないよう手袋をはめて、深さ数センチの穴に、種もみをまきます。児童たちは真剣な表情で取り組みました。体験を終え、鈴木り帆さんは「水がなくてもお米できるんだってびっくりした。お米を作るのは大変。すくすく元気に、おいしいお米に育ってほしい」とわくわくした様子でした。

EDITOR'S NOTE

▶ 勢いづくスタートアップと「静かなイノベーション」(隠岐さや香先生)。激しい時流の中に立って進む、その進み方に大学の矜持があらわれそうです。(広報・アウトリーチ支援室 山崎一希) ▶ かつて就職面接で「ゴールをした子だけでなく、そこまでボールをつないだ子の頑張りにも光を当てたい」と言ったことがありました。LEや防災運動会の記事執筆は、初心を思い出させてくれました。(同 岡田佳那子) ▶ 茨大広報学生プロジェクトの柴田です。前号に引き続き、第4号の編集長を務めました。今号は、新メンバーの後輩たちが主体的に動き、新コーナーも登場。企画会議から取材、記事作成

まで、みんなで協力して試行錯誤しながら進めました。大学内外に伝えたい、茨大の魅力は何か？ を考え抜いて完成した記事です。後輩たちの努力を、ぜひ隅々まで読み込んでください！ 何より、みんなが悩みながらも楽しそうに取り組んでいて感激でした。将来性の塊です。今後ともよろしくお願いいたします！(茨大広報学生プロジェクト 柴田芽依) ▶ 広報・アウトリーチ支援室や学生PJの皆さんとやりとりするたび、紙面が力強くテーマに収束していくのを実感。知の集積地としての大学の懐の深さに圧倒されながら編集と向きあった、激しくも楽しい時間に感謝しています。(編集・笠井峰子)

広報紙「IBADAIVERS (イバダイバーズ)」は、茨城大学ホームページからご覧いただけます。



紙面アンケートを実施しています。感想や次号で取り上げてほしい内容など、ご意見をお寄せください。

